

近畿大学医学部（前期）2013年度入学試験 解答速報 数学

平成25年 1月27日 実施

1 xy 平面に正三角形 ABC があり、3 頂点の座標はそれぞれ $A(0, \sqrt{3})$, $B(-1, 0)$, $C(1, 0)$ となっている。線分 BC を 1:2 に内分する点を D, 線分 CA の中点を E とする。また P は辺 AB 上を動く点とし, Q は辺 AC 上を動く点とする。

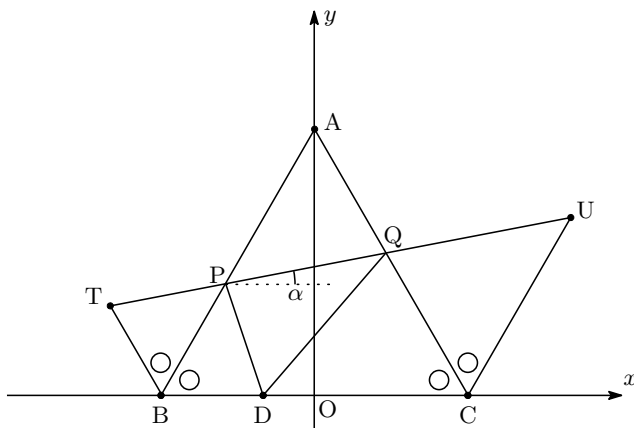
- (1) 直線 AB に関して D と対称な点 T の座標は $(\boxed{\text{ア}}, \boxed{\text{イ}})$ である。
- (2) 線分 TE を $s:1-s$ の比に内分する点を R とする。 $\overrightarrow{BR} = m\overrightarrow{BA} + n\overrightarrow{BC}$ と表すと $m = \boxed{\text{ウ}}$, $n = \boxed{\text{エ}}$ となる。ただし m, n は s の 1 次式である。また $s = \boxed{\text{オ}}$ のとき R は線分 AB 上にある。
- (3) $DP + PE$ の最小値は $\boxed{\text{カ}}$ である。またそのとき $BP = \boxed{\text{キ}}$ となる。
- (4) $DP + PQ + QD$ の最小値は $\boxed{\text{ク}}$ である。またそのとき $\tan \angle BPQ = \boxed{\text{ケ}}$ となる。

解答

ア. $-\frac{4}{3}$ イ. $\frac{\sqrt{3}}{3}$ ウ. $\frac{1}{6}s + \frac{1}{3}$ エ. $\frac{5}{6}s - \frac{1}{3}$ オ. $\frac{2}{5}$ カ. $\frac{\sqrt{31}}{3}$ キ. $\frac{4}{5}$ ク. $\frac{2}{3}\sqrt{21}$ ケ. $-\frac{2}{3}\sqrt{3}$

解説

- (1) $T(p, q)$ において「 $DT \perp AB$ 」かつ「TD の中点が直線 AB 上にある」ことから求めればよいが, $\angle TBD = 120^\circ$ と $TB = \frac{2}{3}$ から求めるのが早い。
- (2) $\overrightarrow{BT} = \frac{1}{3}\overrightarrow{CA} = \frac{1}{3}(\overrightarrow{BA} - \overrightarrow{BC})$, $\overrightarrow{BE} = \frac{1}{2}(\overrightarrow{BA} + \overrightarrow{BC})$ を $\overrightarrow{BR} = (1-s)\overrightarrow{BT} + s\overrightarrow{BE}$ に代入して整理すると $\overrightarrow{BR} = (\frac{1}{6}s + \frac{1}{3})\overrightarrow{BA} + (\frac{5}{6}s - \frac{1}{3})\overrightarrow{BC}$. また R が線分 AB 上にあるとき \overrightarrow{BR} における \overrightarrow{BC} の係数が 0 なので $s = \frac{2}{5}$.
- (3) $DP + PE = TP + PE$ であり, この最小値は線分 TE の長さに等しいからこの長さを求めればよい。またこのとき P は AB と TE の交点であるから, (2) の後半で求めた $s = \frac{2}{5}$ より $m = \frac{2}{5}$ となるので, $BP = 2 \cdot \frac{2}{5} = \frac{4}{5}$.
- (4) 直線 AC に関して D と対称な点を U とすると, その座標は (1) と同様にして $(\frac{5}{3}, \frac{2}{3}\sqrt{3})$ とわかる。 $DP + PQ + QD = TP + PQ + QU$ であり, この最小値は線分 TU の長さに等しいからこの長さを求めればよい。またこのとき $\overrightarrow{TU} = (3, \frac{1}{\sqrt{3}})$ でありこのベクトルと x 軸の正の向きをなす鋭角を α とすると $\tan \alpha = \frac{\sqrt{3}}{9}$ となる。よって $\tan \angle BPQ = \tan(\alpha + 120^\circ)$ を加法定理で展開するとよい。



(4) の参考図 (○は 60°)

2

1 辺の長さが 1 の正四面体 OABC がある. 辺 OA を 1 : 2 の比に内分する点を P, 辺 OB の中点を Q, R を辺 OC 上の点とするとき,

- (1) 線分 PQ の長さを求めよ.
- (2) 三角形 PQC の面積を求めよ.
- (3) R が辺 OC 上を動くとき, 三角形 PQR の面積の最小値を求めよ.
- (4) 頂点 O から三角形 PQR を含む平面に垂線 OH を引く. 点 H が三角形 PQR の内部にあるとき, $OR = r$ の取りうる値の範囲を求めよ. ただし三角形の内部とはその周を含まないものとする.

解答

$\vec{OA} = \vec{a}, \vec{OB} = \vec{b}, \vec{OC} = \vec{c}$ とおく. $|\vec{a}| = |\vec{b}| = |\vec{c}| = 1, \vec{a} \cdot \vec{b} = \vec{b} \cdot \vec{c} = \vec{c} \cdot \vec{a} = \frac{1}{2}$ である.

$$(1) \quad \vec{OP} = \frac{1}{3}\vec{a}, \vec{OQ} = \frac{1}{2}\vec{b} \text{ より } \vec{PQ} = \frac{1}{2}\vec{b} - \frac{1}{3}\vec{a}. \text{ 従って } |\vec{PQ}|^2 = \frac{1}{4}|\vec{b}|^2 - \frac{1}{3}\vec{a} \cdot \vec{b} + \frac{1}{9}|\vec{a}|^2 = \frac{7}{36} \text{ より } |\vec{PQ}| = \frac{\sqrt{7}}{6}.$$

(2) と (3) は同時に解くことにする. $\vec{OR} = r\vec{c}$ ($0 \leq r \leq 1$) とおく. $r = 1$ のとき R は C に一致する.

$$\vec{PR} = r\vec{c} - \frac{1}{3}\vec{a} \text{ なので, } |\vec{PR}|^2 = r^2|\vec{c}|^2 - \frac{2r}{3}\vec{a} \cdot \vec{c} + \frac{1}{9}|\vec{a}|^2 = \frac{9r^2 - 3r + 1}{9},$$

$$\vec{PQ} \cdot \vec{PR} = \left(\frac{1}{2}\vec{b} - \frac{1}{3}\vec{a}\right) \cdot \left(r\vec{c} - \frac{1}{3}\vec{a}\right) = \frac{r}{2}\vec{b} \cdot \vec{c} - \frac{1}{6}\vec{a} \cdot \vec{b} - \frac{r}{3}\vec{a} \cdot \vec{c} + \frac{1}{9}|\vec{a}|^2 = \frac{3r + 1}{36},$$

$$\Delta PQR = \frac{1}{2} \sqrt{|\vec{PQ}|^2 |\vec{PR}|^2 - (\vec{PQ} \cdot \vec{PR})^2} = \frac{1}{2} \sqrt{\frac{7}{36} \cdot \frac{9r^2 - 3r + 1}{9} - \left(\frac{3r + 1}{36}\right)^2} = \frac{\sqrt{27r^2 - 10r + 3}}{24}.$$

$$\text{これに } r = 1 \text{ を代入して } \Delta PQC = \frac{\sqrt{27 - 10 + 3}}{24} = \frac{\sqrt{5}}{12}. \text{ ((2) の答)}$$

また $27r^2 - 10r + 3 = 27\left(r - \frac{5}{27}\right)^2 + \frac{56}{27}$ であるから, ΔPQR は $r = \frac{5}{27}$ のとき

$$\text{最小値 } \frac{1}{24} \sqrt{\frac{56}{27}} = \frac{\sqrt{42}}{108} \text{ をとる. ((3) の答)}$$

(4) 上と同様 $\vec{OR} = r\vec{c}$ である. $\vec{OH} = k\vec{a} + l\vec{b} + m\vec{c}$ とおく.

$\vec{OH} \cdot \vec{PQ} = 0 \iff \vec{OH} \cdot (\vec{OQ} - \vec{OP}) = 0 \iff \vec{OH} \cdot \vec{OP} = \vec{OH} \cdot \vec{OQ}$ が成り立つ. 同様に $\vec{OH} \cdot \vec{OP} = \vec{OH} \cdot \vec{OR}$ も成り立つ.

ここで $\vec{OH} \cdot \vec{OP} = \frac{1}{3} \left(k + \frac{l}{2} + \frac{m}{2}\right), \vec{OH} \cdot \vec{OQ} = \frac{1}{2} \left(\frac{k}{2} + l + \frac{m}{2}\right), \vec{OH} \cdot \vec{OR} = r \left(\frac{k}{2} + \frac{l}{2} + m\right)$ なので, 連立方程式を解くと $k : l : m = (7r - 1) : (3r - 1) : (3 - 5r)$ が得られる. H が三角形 PQR の内部にあるための必要十分条件は, k, l, m がすべて正であることだが, 図形的に考えて k, l, m がすべて負になることはありえないので, k, l, m がすべて同符号であればよい. これより答は $\frac{1}{3} < r < \frac{3}{5}$ である.

3

定義域を $0 \leq x \leq 2\pi$ とする関数 $f(x) = |\sin 2x - 2\sin x - 2\cos x + 1|$ がある. $t = \sin x + \cos x$ とおき $f(x)$ を t で表した関数を $g(t)$ とおく.

- (1) 関数 $g(t)$ を求めよ.
- (2) t が取りうる値の範囲を求めよ.
- (3) $f(x)$ が取りうる値の範囲を求めよ.
- (4) 方程式 $f(x) = k$ の異なる実数解の個数 l を k の値で場合分けして求めよ.

解答

- (1) $t^2 = 1 + \sin 2x$ となるので $f(x)$ に代入して, $g(t) = |t(t-2)|$
- (2) $t = \sqrt{2}\sin\left(x + \frac{\pi}{4}\right)$ より, $-\sqrt{2} \leq t \leq \sqrt{2}$
- (3) $y = g(t)$ のグラフを (2) の範囲で描くと図1のようなになるので, $g(-\sqrt{2}) = 2\sqrt{2} + 2$, $g(1) = 1$, $g(\sqrt{2}) = 2\sqrt{2} - 2$ より,

$$0 \leq f(x) \leq 2\sqrt{2} + 2$$

- (4) $t = \sqrt{2}\sin\left(x + \frac{\pi}{4}\right)$ のグラフを描くと図2のようなになる. 図1とあわせて考えると,

$$\begin{array}{lll} k < 0 \text{ のとき} : l = 0, & k = 0 \text{ のとき} : l = 2, & 0 < k < 2\sqrt{2} - 2 \text{ のとき} : l = 4, \\ k = 2\sqrt{2} - 2 \text{ のとき} : l = 5, & 2\sqrt{2} - 2 < k < 1 \text{ のとき} : l = 6, & k = 1 \text{ のとき} : l = 5, \\ 1 < k < 2\sqrt{2} + 2 \text{ のとき} : l = 2, & k = 2\sqrt{2} + 2 \text{ のとき} : l = 1, & k > 2\sqrt{2} + 2 \text{ のとき} : l = 0 \end{array}$$

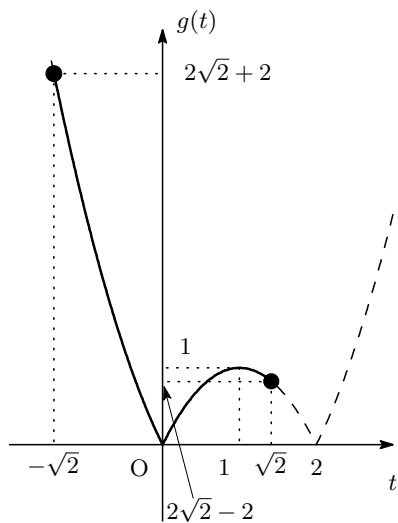


図1

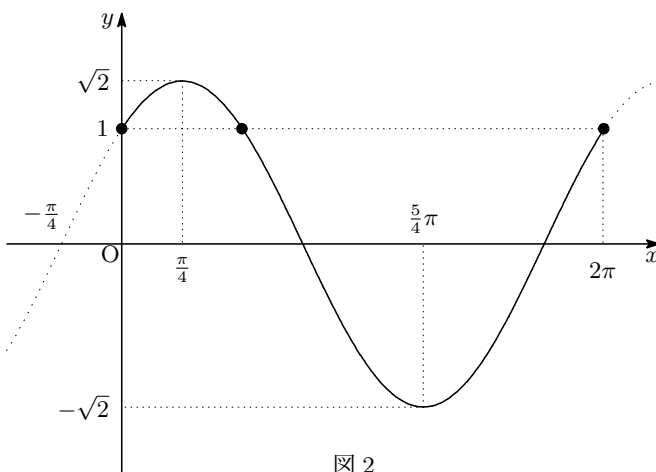


図2

1 図形問題 (直線に関する対称点の応用)

レベルは標準

典型的な出題だが図形的な処理や \tan の扱いに慣れていないとかなり手間取るだろう。
ベクトルによる誘導がややうざったい。(相似を利用するのが早い)

2 空間ベクトル (正四面体)

レベルは標準～難

(3) までは標準レベルの典型題だが計算が煩雑。

(4) が難しい。 $\vec{OH} \cdot \vec{PQ} = 0 \iff \vec{OH} \cdot \vec{OP} = \vec{OH} \cdot \vec{OQ}$ などに気づかなければ無理だろう。

3 合成関数の解の個数

レベルは標準

典型題。このテーマは去年も出たが今回の方が少し易しい。

t と x の対応関係が煩雑で注意力が要るが何とかここで満点が欲しい。

例年より点取りにくい。全体的に典型的出題といえるが、どれも処理力を必要とする。やや難度も高く数学を苦手とする生徒にはかなりハードルが高かったのではないか。特に大問 2 の (4) は難問。ここで時間を使いすぎると失敗する。他の問題に時間をまわすべきである。トータルボーダーは 6 割程度か。